堤屋敷遺跡（つつみやしき）

遺 跡 番 号　平成 16 年度登録
調 査 次 数　第２次
所　在　地　米沢市万世町字桑山
北緯・東経　37 度 53 分 38 秒・140 度 9 分 38 秒
調査委託者　国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
調 査 原 因　東北中央自動車道（福島～米沢）新設事業
調 査 面 積　10,000 ㎡
現 地 調 査　平成 19 年 5 月 8 日～ 11 月 9 日
調査担当者　菅原哲文（調査主任）・武田伸一・山木　巧
調 査 協 力　東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所・置賜教育事務所・米沢市教育委員会
　　・万世コミュニティーセンター
遺 跡 種 別　集落跡
時　　代　縄文時代・平安時代・中世・近世
遺　　構　竪穴住居跡・竪穴建物跡・掘立柱建物跡・溝跡・土坑・陥穴・墓壙・柱穴・焼土遺構
遺　　物　縄文土器・石器・須恵器・土師器・中世陶磁器・近世陶磁器・古銭・木製品
　　(文化財認定箱数：91 箱)

調査の概要

堤屋敷遺跡は、米沢市街地から南東約 5 ㎞に位置しており、南側には標高 502m の早坂山、東側には天王川 (梓川) が北流している。遺跡周辺は、早坂山の山腹の傾斜地と天王川による扇状地で形成されており、南から北へと標高が低くなる地形である。古くから福島県とをつなぐ交通の要衝であり、中世の城館跡が数多く確認されている。

堤屋敷遺跡は、東北中央自動車道 (福島～米沢) の新設事業に先立ち、平成 16 年度の県教育委員会による分布調査で発見された遺跡である。その結果、日本道路公団東北支社 (現・東日本高速道路株式会社東北支社) と県教育委員会との協議が行なわれ、事業予定地にかかる埋蔵文化財については財団法人山形県埋蔵文化財センターが委託を受けて、記録保存のための発掘調査を行うこととなった。

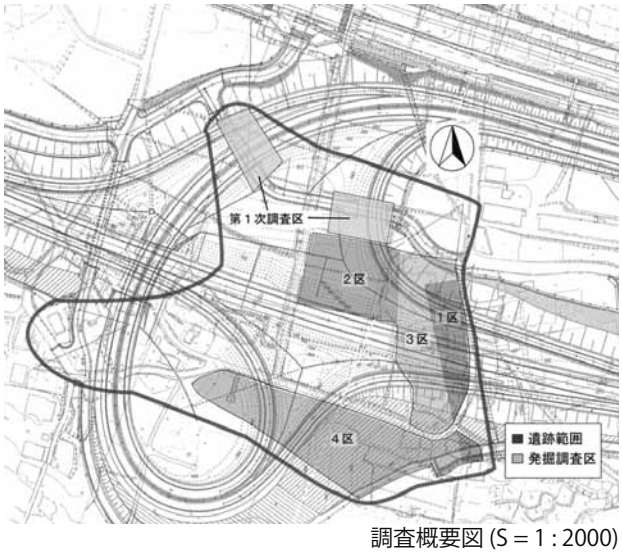
第 1 次調査は、平成 17 年度に約 1,940 ㎡にわたって実施されており、掘立柱建物跡 1 棟が確認されている。

本年度の第 2 次調査は、 1 次調査区から南側の範囲である。調査面積が約 10,000 ㎡に及ぶため、工事との調整から調査区を 1 ～ 4 区に分割し、順次調査を進めた。

遺構と遺物

1 区では、江戸時代にあたると考えられる建物の柱穴や土坑、溝跡が検出された。遺物は、土坑 (SK26) から下駄などの木製品が出土した。また、寛永通宝（かんえいつうほう）などの古銭、肥前産の染付碗などの近世陶磁器が多く出土した。

2 区では、石鏃（せきぞく）、磨製石斧（ませいせきふ）、打製石斧（だせいせきふ）、凹石（くぼみいし）や磨石（すりいし）などの縄文時代の石器が出土している。調査区内からは、縄文時代の住居跡などは確認されていない。当遺跡の東側に位置する山ノ下遺跡では、埋設土器（まいせつどき）などの縄文時代の遺構が確認されている。これらの遺物は、周辺に存在



調査概要図 (S = 1 : 2000)

する縄文時代の遺跡に関わるものと考えられる。

平安時代の遺構では、北西端で竪穴住居跡 (ST39) が１棟検出された。規模は一辺約５ｍ規模の方形プランであり、周溝と柱穴が確認された。調査区の中央を南北に伸びる溝跡 (SD30) からは、土師器(はじき)や須恵器(すえき)の坏や甕の破片が出土している。

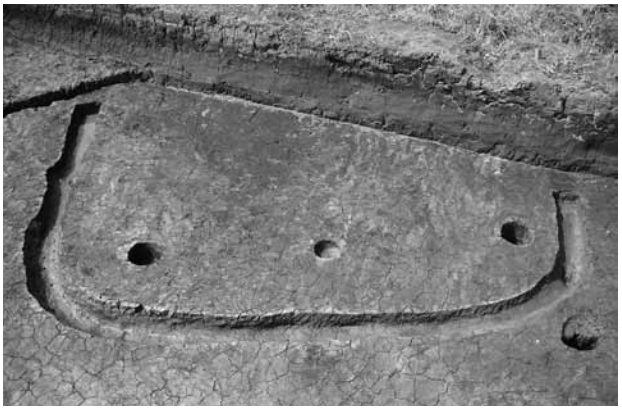
中世の遺構では、当時の一般的な建物である掘立柱(ほったてばしら)建物跡がある。２区では３棟（ＳＢ 48・ＳＢ 55・ＳＢ 75）が確認された。溝跡（SD30）も、この時代に引き続き利用されているようである。溝跡からは、黒漆が塗られた漆器の碗や皿が出土し、皿の底部には、「米」とも読み取れる刻書(こくしょ)が記されている。陶磁器では、中国産の青磁(せいじ)の碗が出土している。

３区では、江戸時代を中心とする３棟の掘立柱建物跡や溝跡が検出された。溝の中に偏平な石の礎板を据えて柱を建てた SB118 建物跡、柱穴の底に礫を敷いて柱を建てた SB105 建物跡が確認された。いずれも２区の建物群より時期的に新しくなる可能性がある。３区南端部の溝跡 (SD166) からは、内耳土鍋(ないじどなべ)を中心とする中世の遺物がまとまって出土している。また、焼土と共に内耳土鍋が出土した焼土遺構 (SX165) は、カマドとして使用されていた可能性が考えられる。

遺跡南側の傾斜地にあたる４区では、掘立柱建物跡や溝跡を中心とする､中世の集落跡が確認された。集落は、外側を幅２ｍの溝跡で囲まれ、内側には掘立柱建物跡が繰り返し建てられている。建物群は４区で４地点確認され、６棟の建物跡を検出した。規模は 10 ｍに満たない小形の建物である。竪穴建物跡は１棟確認され、床面に炭や焼土が検出されたことから、工房などの役割が考えられる。縄文時代の遺構としては、列をなして配置された陥穴(おとしあな)が 10 基確認された。底面には落ちた獲物が逃げないように逆茂木(さかもき)を据えた痕が認められる。また、江戸時代末の陶磁器などが出土する墓壙(ぼこう)が 10 基確認された。

遺物は、集落の外側を囲む溝跡 (SD168・205) からの出土が大半を占め、15 ～ 16 世紀と考えられる遺物が大量に廃棄されている。内耳土鍋、擂鉢(すりばち)、甕などの陶器

２区 遺構完掘状況



２区 ST39 竪穴住居跡

３区 SB105・118 掘立柱建物跡

や土器、中国産の青磁碗、漆器の椀や皿、曲物・下駄などの木製品、砥石や石臼などの石製品、刀の鍔（つば）や貨幣などの金属製品が出土している。

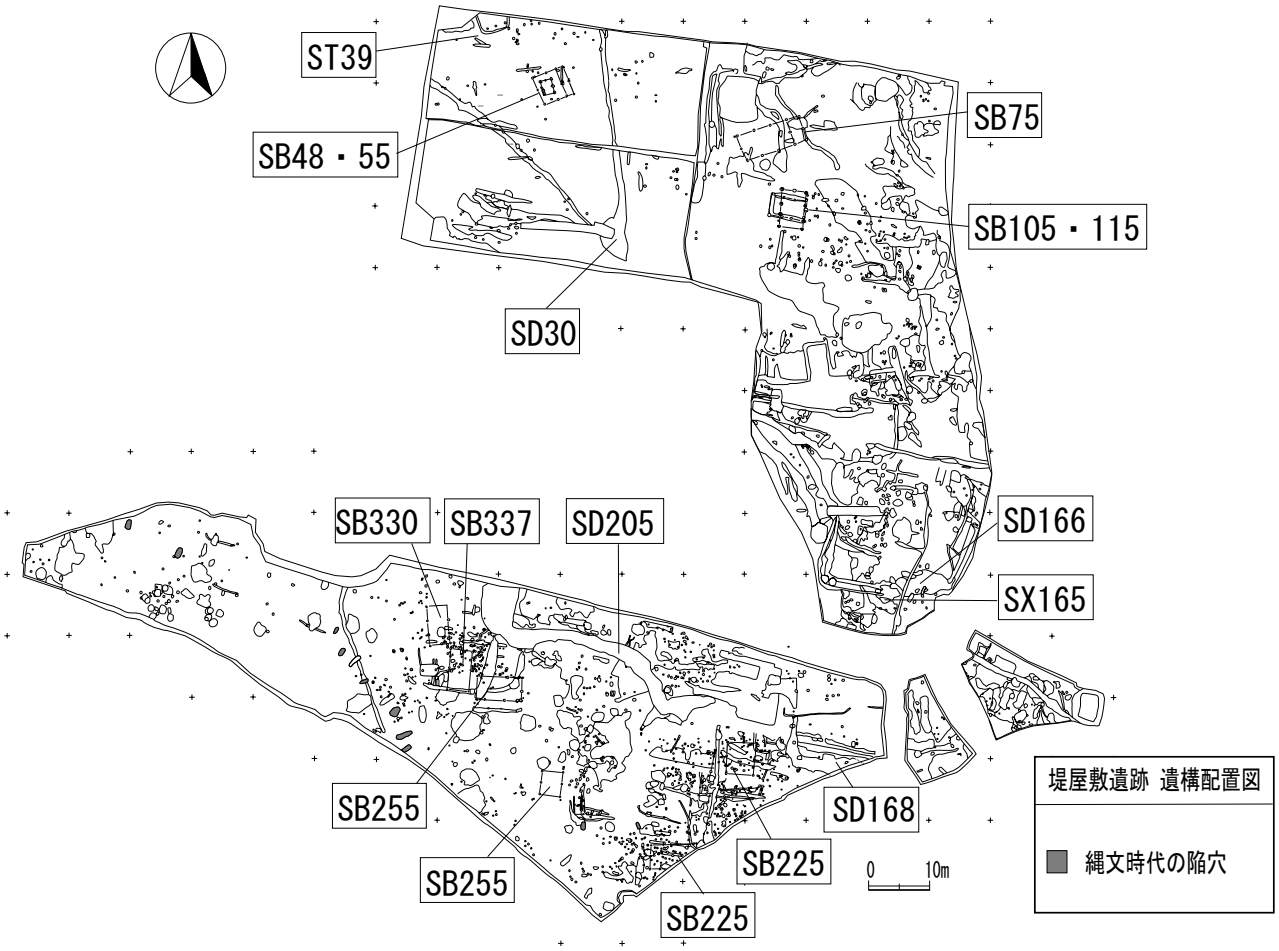
ま と め

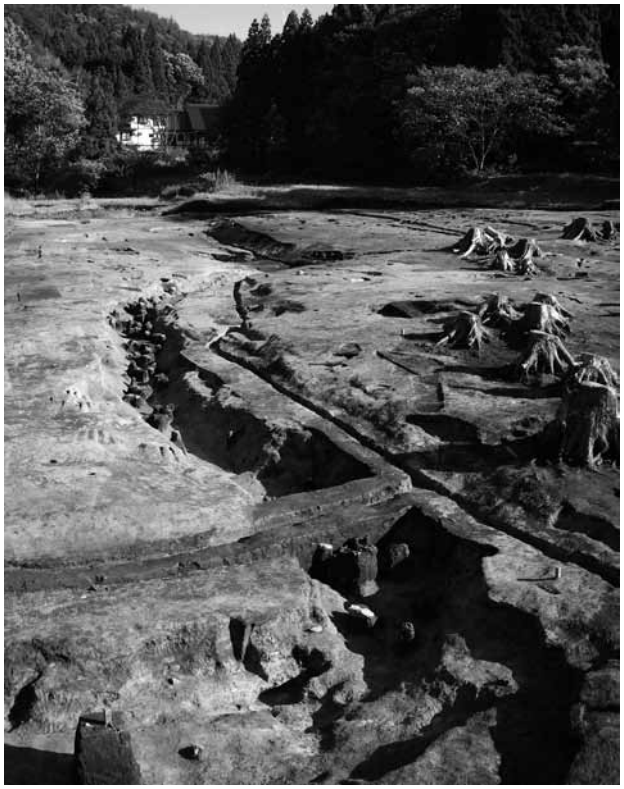
今回の調査では、置賜地域における中世集落の全体像をはじめ、近世の集落、縄文時代・平安時代の遺構の存在が明らかとなった。特に中世の集落跡は、溝で区画された内側に、いくつかの建物群で構成される。

この時期には生活用具として、内側に３ヶ所の把手が付く内耳土鍋があり、20 個体以上も出土している。当時の置賜地域を支配していた伊達氏の領地内で特徴的に出土することが指摘されている。また、遺跡の南にそびえる早坂山には、早坂山館をはじめとする伊達氏に関連する中世の山城があり、集落跡との関わりが考えられる。

江戸時代になると、１区・３区などの標高が低い北側の地点に集落が営まれる。江戸時代末の絵図面では、「桑山村（くわやまむら） 堤（つつみ）」の字名が確認される。遺物では、寛永通宝などの古銭や、九州の肥前で焼かれた伊万里焼、福島県の岸窯や相馬焼などの陶磁器が多く出土している。

調査区 全景



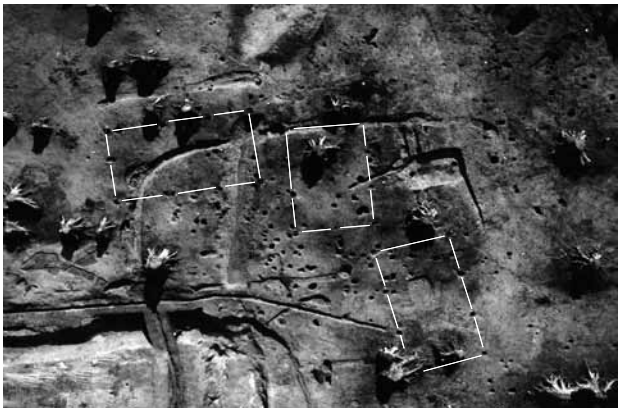


4 区 SD205 中世溝跡 完掘状況

4 区 SD205 中世溝跡 遺物出土状況

漆器皿（底面に「米」の刻書）

3 区 SX165 焼土遺構



4 区 中世の掘立柱建物群

内耳土鍋

近世陶磁器